

序

萩原正樹先生は、二〇二六年三月をもってご定年を迎えられます。立命館大学人文学会は、先生の積年のご功績を称え、その学恩に深い感謝の意を表するため、ここに「退職記念論集」を編み、謹んでご呈上いたします。

萩原正樹先生は一九八三年三月に立命館大学文学部文学科中国文学専攻をご卒業され、その四月に同大学院文学研究科博士課程前期課程東洋思想専攻に入学されました。一九八五年四月から大阪府立大正高等学校教諭としてご勤務される傍ら、ご研究を続けられ、一九八六年三月に立命館大学大学院文学研究科博士課程前期課程東洋思想専攻をご修了されました。そして高等学校でのご勤務を継続されながら、一九八六年四月には同大学院同研究科博士課程後期課程東洋思想専攻に進学され、一九八九年三月に博士課程後期課程を単位取得満期退学されました。

その後、相愛大学、武庫川女子大学、池坊短期大学等の大学・短期大学において教歴を積み、一九九三年四月に小樽商科大学に専任講師としてご着任され、同年一〇月には助教、二〇〇五年二月には教授にご昇進されておられます。立命館大学には二〇〇七年四月に文学部教授としてご着任されました。

萩原先生は、唐宋詞の研究、具体的には詞牌・詞体と詞譜、詞論等の研究において第一人者であり続けてこられました。詞というジャンルは、中国の唐に始まり、宋の時代に隆盛した韻文で、宋代に最も盛んに作られたものです。もちろん宋以後も多くの作者が現れ、また現代でも詞を作ったり、その文学を楽しむ人は多く存在しています。詞は音楽に合わせて歌われた歌辞文芸であるため、いわゆる漢詩とは異なるさまざまな特徴をもった非常に興味深い文学形式です。

先生は、日本では十分に知られているとは言いがたいこの「詞」について、日本文学・中国文学の視点から研究しておられます。その際、特に明治・大正期の詞人である森川竹磔の文学研究を通じて、「詞」の魅力を一貫して発信しておられます。森川竹磔は明治二（一八六九）年に東京に生まれ、大正六（一九一七）年に没した漢詩人です。森槐南に学び、随鷗吟社の客員となり、のち同社の機関誌「鷗夢新誌」の編集発行人として投稿詩の指導に当たりました。

「詞」や森川竹磔に関するご研究が結実したのが、『詞譜』及び森川竹磔に関する研究』（中国芸文研究会、二〇一七年三月）であり、この書籍をもとに、二〇一七年度に立命館大学より博士（文学）を授与されています。本書では、第一部において明清代の代表的な「詞譜」である『詩餘函譜』『詞律』『欽定詞譜』などが論じられ、第二部において森川竹磔の生涯や、その著『詞律大成』など

が論じられた大著です。

もちろん、これ以外にも、先生は数多くのご業績をおもちで、一貫して本学文学部、東アジア研究学域中国文学・思想専攻の研究および教学を導いてこられました。萩原先生は、学部生や大学院生に対し、いつも穏やかにご指導をくださっており、同僚教員からは厚い信頼を集め、学部生や大学院生からも慕われておられます。学域・専攻における諸業務をはじめとして教学運営や組織運営の役割も担われてこられ、研究のみならず、教育や大学組織の運営においても長年にわたり多大なご尽力を重ねてこられました。

東アジア研究学域は、文学部にあつて歴史ある大切な学域の一つです。中でも萩原先生がご所属の中国文学・思想専攻では、古代から現代の中国におけるさまざまな文学・思想を探究し、それを通して東アジアの文化の基層と本質を深く理解する専攻で、白川静先生をはじめ多くの優れた研究者を輩出してこられました。この専攻教学や研究に対して萩原先生は、大変重要な役割を果たされました。文学部教授会は、先生のご貢献に深く謝意を表するため、来る四月一日付をもって、名誉教授の称号をお贈りすることにしました。今後とも私ども後進をお見守りいただき、文学部および文学研究科の教学発展のために、変わらぬご高配を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

二〇二六年二月

立命館大学人文学会会長・文学部長・文学研究科長

遠藤英樹